



尾崎喜八が作詞した富士見小学校校歌の歌碑。今でも学校行事の節目には、校舎に子どもたちの歌声が響く

た」と振り返った。  
書く前に必ず

訪れイメージ

多くの校歌がそうであるように、喜八の詞も1番は山川草木など身近な自然の情景が歌われ、2、3番と続くにつれ、理想や希望への意志が込められる。豊平小の2番は「清くけだかい白樺を 朝な夕なな校庭に 遠い古人の生活を しのぶ遺跡は村のうち 歴史と知恵のふるさとに うまれて学ぶうれしさよ」とある。富士山、八ヶ岳、校章のモチーフ駒草が詠われた岡谷南高の3番は「真夏を山に鍛えては 氷に冬を楽し

して40校目に富士見小(72年)の校歌を作った。

富士見小の3番は「理想は高い空の雲 心は広い地のながめ 両親、仲間、先生たちの 愛の思い出富士見高原 ここに学んで人と成る日も幼な心の帰るふるさと」このふるさとを忘れまい。喜八によると、「詩は言葉と文字の芸術であると同時に作者の心の歌でもある」。校歌もまた詩の一つであると考えた喜八にとつて、この連は富士見で過ごした日々を想起した「心の歌」であったかもしれない。

言葉の探究は

今もこの地で

富士見町高原のミュージアムには喜八の自筆原稿、愛用のカメラ、自然観察に使用した双眼鏡、登山靴など寄贈資料から成るコーナーがある。島木赤彦や伊藤左千夫など多くの歌人や文人にゆかりがある同町では、毎年秋に詩の心を後世につなげる「富士見高原詩のフォーラム」が開かれる。自分の心を凝視し、自然と一致する瞬間を見つけようとする言葉の探究は、今も富士見の地で続けられている。

# に7年40超の校歌作詞

たむきに生きる人びとの賛歌を詠んだ。自らの心情を書名に掲げ55年に刊行した詩集「花咲ける孤独」は、遅咲きの詩人の後期を代表する作品となった。

一方で地元の人との温かい交流も生まれ、講演のほか校歌制作も依頼されるようになる。県内では旧岡谷南部中(49年制定)、信大付属松本中(51年)岡谷南高校

(52年)茅野市豊平小(同)などを手掛け、今も多くの学校に歌碑が立つ。

喜八は校歌作詞の思い出をつづった文章で、「書く前に必ず一度はその学校まで行って、その校庭のまんなかに立って周囲の風景だのを見ないと気が済まない」とし、北海道の1校を除き、「その他はどんな山間僻地へもすんで出掛け